



Book Review

理系のための 楽しい研究生活

坪田一男 著

本書の著者ほどごきげんで幸福な研究者はいるだろうか。

世界の医学会で最も信頼されている『*The New England Journal of Medicine*』に論文を発表し、角膜のスペシャリストとして、また臨床医としても活躍している坪田一男先生に、研究の支援をしたい、共同研究を進めたいという研究者や企業が跡を絶たない。

著者はこれまでテレビなどのメディアにも多数登場しドライアイについて解説したり、目の大切さを訴えたりしてきた。普通このようなことをすると“色物”扱いされるのだが、著者はそれどころか着実に学会の重要な地位を得ている。というよりも、もはや日本の代表的な眼科医の一人として認識されていることを、私は海外の多くの学会で確かめている。

そしてなによりも素晴らしいのは、さまざまなことを飄々とやってのけ、常に軽快なフットワークと笑顔を忘れないということだ。まるで隣の町に行くようにヨーロッパやアメリカなどの世界中の学会に参加し、研究者に会いに行くのだ。医学界特有のくさみも、暗さも、屈折も著者には微塵もない。面白そうに社会の役に立つことがあれば必ず顔を出す。アンチエイジング医学を手掛けているのもその一つだろう。

本書はこうした著者の研究生活をj知るのに、またとない一冊である。

どのような分野の研究者であ

れ、誰にでも成功するチャンスがあるというのは嘘でも幻想でもない。しかしながら、自分がどういふ研究生活を望むかという具体的な戦術と戦略のない人間には、最初からチャンスがないということが本書から読み取れる。自分が何をしたいのか、どのようになりたいたのかがわかっていふから、その目標に向かって具体的な努力が可能になるということが著者からのメッセージだろう。他者によって使い果たされることと自分で自分を使い果たすことの境界を見極めながら、自身のやりたいこと、できること、社会が求めていることをする。この三つが著者の行動原理になっていると思う。

自分自身が学生だった頃を思い出すと、恐縮ながら講義から何か感銘を得たという記憶もなく、その後の研究生活からも自分が何者でもないということに遅ればせながら思い至り、漠然とした不安を持って余していた頃、数少ない出会いというものがあったように思う。私の場合、その一人が本書の著者であり、著者との20年余の共同研究を介して、その後の研究生活を続けてこられたということになる。

とはいえ、研究を続けていくということは多難の連続である。行つた実験が必ずしもすべて結果に結びつくことはありえない。誰もがその過程で多くの試練を与えられ、深く悩むことがある。試練を避けて通り過ぎることもできるが、何度か困難を経験すると、その後は次から



A5判、276頁
定価：2,940円
(本体2,800円＋税5%)
医歯薬出版刊

次へと限りなく魅力的な顔を見せ始める。それが研究のような気がする。

研究とは、必ず出会う挫折や試練とどう対峙し、そのつどどう再起するか連続であり、それはまさに人生そのものようだ。報われない努力、運不運…。人生には常に理不尽がつきまとう。サッカー・ワールドカップの日本代表の座一つとっても明白である。

順風満帆な研究生活など本書の著者にもありえなかつたはずである。研究者にとって誰にでも等しく起こりうる不条理や理不尽とどう対峙し、どう再起すべきか。本書はそれを考えるうえでの一助となるだろう。

斎藤一郎

(鶴見大学歯学部教授)